

巻頭言

学園長 更科幸一

2024 年度より自由学園では、中等教育段階を共生共学化しました。創業者である羽仁もと子は 1933 年、雑誌「婦人之友」(4 月号)の「座談会 男女共学実行可能の理論と方法」において、国際共学の必要性を説き、1921 年に女学校としてスタートした自由学園の共学化も目指しました。しかし当時は実現せず、1935 年に男子部を設立、その後長く別学の学校として運営してきました。男女別学当時、いくつかの問題が出てきていました。特に男子寮における男性性の強まりと、それが学校生活にも影響していることは長く問題とされてきました。入学初年は全員が入寮していた時は特に、上下級生間で明確なピラミッド型組織が形成され、人本来の優しさや思いやり、温かさを失う状況が少なくとも 2010 年代までは続きました。生徒と教師が対話を続け、少しずつ改善してきましたが、まだ途上です。創業者は、社会を創るのは女性だけではない、皆が協力していく必要があると約 100 年前に考えましたが、今年度から始まった共生共学により、上記のような問題の解決も含め、その理想を実現していくことを目指しています。

私は 2024 年 4 月に学園長に就任しました。その後約半年間は各部の現場をまわって様子を知るところから始めましたが、学校全体での教育観、子ども観、人間観が創業者の考えとはずれてきている部分があると気づきました。キリスト教を土台とする学校であることが教職員に十分に内化されていないこともその原因にあると感じました。また、学園独自の教育を理解していく教師の育成や、保護者の方々にも自由学園を深く理解していただく機会の創出についても検討が必要でした。特に、創業者が真の自由人を育てるために必要と考えた、生活そのものを教育の機会としていく「生活即教育」については、教職員のより一層の理解と実践への反映が求められています。

これらの問題意識から、24 年度後半は 25 年度に向けて 4 つのプロジェクト(自由学園のキリスト教育、自由に生きるための学び、生活に根ざした学び、ごちゃまぜの学び)の立ち上げ準備をしました。創業者が目指した社会、平和で愛にあふれた社会の実現のために、現代社会の中で自由学園がどのような教育を行っていくのかを考え始めています。また、私たちが目指す新しい社会、つまり資本主義や開発主義にのみ活路を見出そうとするような社会ではない社会を実現させるためには、最高学部での学びが非常に重要となってきます。学生数減は直視しなければならない問題ですが、一方で外部の高校から最高学部を選んでくださる方も出てきています。

今の日本社会は、経済優先の思想がスタンダードになってしまい、新自由主義がそれを加速させ格差も広がっています。こうした現状に抗う教育の実現・継続は、取り組みがいのある課題です。「思想しつつ生活しつつ 祈りつつ」という理念は、愛にあふれた社会を創り出すための強力な土台です。この言葉を常に実行しつつ、次年度も歩んでいきたいと思います。